

謝 辞

1991年8月、日印両国の友好と青年文化交流促進のため、前年に引き続いて、第2回SGI(創価学会インタナショナル)インド青年文化訪問団(月氏会2期、団員49名)が、インド文化関係評議会(ICCR)の招聘によりインドを訪問した。筆者もその一員として、11日間、インドに滞在し、様々の文化行事や親善交流に参加した。訪問3日目(8月20日)、法華経を中心としたテーマで東洋哲学研究所創立30周年記念・日印合同シンポジウムがニューデリーにおいて開催された。インド文化国際アカデミー理事長ローケーシュチャンドラ博士がこのシンポジウムに出席し講演した。その日の昼食会の折、筆者はローケーシュチャンドラ博士との懇談の機会を得て、いつしか話題が梵文法華経写本に及んだ。翌日、博士はSGI会長池田大作先生に贈呈したいと、一本のマイクロフィルムを筆者に託された。それは、かつてソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部(現ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部)に所蔵されていた、梵文法華経の紙写本を撮影した貴重な資料であった。現在、その原本の保管場所は不明であるが、写真版が博士によって出版されている。

翌年、筆者はこの紙写本についての論考を『東洋哲学研究所紀要』第8号(1992年)に掲載し、その抜刷を梵文法華経写本の世界の権威である徳島大学戸田宏文教授に送った。戸田教授は、その抜刷を一読し、筆者の学問の稚拙さを見抜かれたのであろう。「見学のつもりで一度、徳島に来てみては」との電話があった。1992年の12月29日か30日のことであったと記憶している。翌年2月4日、筆者は初めて徳島大学の研究室に戸田教授を訪ね、写本研究の進め方、研究の歴史と現状などについて種々有益な教示をいただくことができた。その後、筆者は個人的に何度か研究室を訪問し、様々な資料の閲覧・貸し出しなどの援助をたまわった。

1994年1月、創価学会は法華経の梵語写本などを刊行するための「出版委員会」を発足させ、東洋哲学研究所にその研究と編纂の業務を委嘱した。東洋哲学研究所の委嘱研究員として写本研究を続けていた筆者は、同研究所の了解と支援を得て、戸田教授から写本解読の訓練を受ける幸運に恵まれた。研究室での「勉強会」(筆者が勝手にこれを勉強会と称しているにすぎないのであるが)の教材として、東京大学総合図書館所蔵梵文法華経の紙写本(No.

414; 本書での略号T8)が選ばれた。この紙写本は、ネパール系の紙写本で、貝葉写本よりかなり新しいものであるが、いわゆる「ケルン・南條本」のテキストの校訂に使用された写本の一つであり²、数多いネパール系紙写本の中でも最優先に解読され、ローマ字に転写する価値ある資料の一つである。勉強会は、1996年6月15、16日を第1回として、1年間に3回、一泊二日のスケジュールで1999年6月16、17日の第9回まで続いた。

本書は、戸田教授と筆者との勉強会の成果である。この度、戸田教授の推薦と「出版委員会」の承認を得て、出版の運びとなった。T8のローマ字転写は、かつて立正大学の「法華経文化研究所」のネパール本研究会が計画し、その作業を進めていた³。この紙写本の重要性を見抜き、ローマ字転写作业をどこよりも早く開始していた「法華経文化研究所」ネパール本研究会の炯眼と先駆の試みに敬意を表す。

最後に、これまでお世話になった方々への感謝の言葉を述べて、この謝辞を締めくくりたい。まず、SGI会長池田大作先生に幾重にも、心からの感謝を捧げる。1961年2月、インドのブッダガヤを訪問され、その時の構想の一つを東洋哲学研究所として具体化され(発足1962年1月、法人認下1965年12月)、さらに1990年、日印の文化交流と相互理解のために、インド青年文化訪問団の派遣を提案されたことが本書誕生の淵源となったからである。次に、驚くべき忍耐力によって、40代後半にもなった愚鈍な筆者に写本の文字の読み方、サンスクリット語はもとより、仏教学の基本を教え、導かれた戸田教授に心よりお礼を申しあげたい。教授の包容と激励が、この困難な作業を挫折から救ったと思うからである⁴。

次に、編集および翻訳の総括など本書の出版に関わる煩雑な作業の全般を引き受け、貴重な助言と公私にわたる支援をいただいた、有能な編集者であり、写本研究の学友でもある水船教義氏(東洋哲学研究所委嘱研究員)に深く感謝する。また、本書出版のための支援を快諾された創価学会秋谷栄之助会長、東洋哲学研究所の森田康夫代表理事、川田洋一所長、元研究部長の塩津徹氏(現創価大学教授)、出版を陰で支えていただいた市倉洋一事務局長ならびに同研究所の関係者の方々、東洋哲学研究所に私を紹介してくださった吉永慎二郎氏(秋田大学教授)、創価学会国際室山口弘務国際出版部長、常に激励をいただいた(株)セッセン インターナショナル川村良子社長、英文の校正をしていただいた創価学会国際室のアンソニー・ジョージ氏に厚くお礼を申し上げたい。また、筆者を理解し、包容し、声援を送っていただいた、多くの人々と家族に心から感謝の言葉を述べたいと思う。最後に、この写本をローマ字版として出版することを許可された東京大学総合図書館の関係各位に衷心からの謝意を表したい。

2002年11月18日

東洋哲学研究所委嘱研究員

小槻 晴明

追記

戸田教授は2003年8月25日、本書の完成を見ることなく、ご自宅にて逝去された。誠に無念の極みである。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

合掌

2003年8月30日

編者

注

1. Lokesh Chandra (1984). 本書での略号はStP. この写本については、戸田 (2000, p. 363) および (2001, pp. 5–11) の注1も参照のこと。なお、本書におけるネパール系梵文法華經写本の略号については、「梵文法華經写本略号一覧」(pp. xxxiii–xxxiv) を参照。(以下「本書の略号」と称す。)

2. Kern and Nanjio (1908–1912) では略号としてKがこれに充てられている。

3. この紙写本(T8)と東洋文庫が所蔵する法華經の貝葉写本(K)のローマ字版テキストの作成がかつて計画され、実行されていた。しかし現在までのところ、それらの作業は未完のようである。湯山 (1971, p. 8; 1972a, p. 8) の短信に記載のネパール本研究会の記事、Institute for the Comprehensive Study of [the] Lotus Sutra (1977–1982, vol. 1, p. vii), および湯山 (1968, p. 108) も参照のこと。

4. 戸田教授は2002年3月、徳島大学を退官され、34年住まわれた徳島を離れ、故郷福岡県筑紫野市に帰られた。